第３１９回　令和８年１０月２９日（木）

「コミュニケーションツールの変化」

明治の初期には電話がなく、主なコミュニケーションは対面で話すことと手紙だったと思います。それが電話の登場によってどのように変化したのか。

電話が普及することで文書力について不安視されることがあったのではないかと推測します。もしかすると座敷に正座をして三つ指をついて挨拶をする風習ができない子どもが増えたのかもしれません。古い映画を見ると 1970 年代の初老の人たちは座敷に正座をして頭を下げる挨拶が日常でした。現在はそのような挨拶をあまり見かけなくなっています。

携帯電話が販売されると「取次ぎ」の文化が廃れていきました。固定電話のころは友達に電話をしても相手の親が最初に出ることが多く「こんにちは。〇〇です。××くん、いますか」と取り次いでもらったものです。今はそのような挨拶ができる子どもはほとんどいないと思います。

スマホが中心となって電話で会話するよりメールのほうが多くなると挨拶すらしないようになります。何しろ名乗らなくても画面上に自分の名前が表示されているはずですから。人間はコミュニケーションツールが便利になればなるほどコミュニケーションは下手になるような気がします。

スマホは相手が何をしているのかわかりません。固定電話は少なくとも家にいることがわかります。しかしスマホはつながっても相手がどこにいるのか、何をしているのかは正確にはわかりません。これも便利になったようで、実際は不便になっている一例ではないかと思います。

スマホはいつ、どこでかかってくるかわかりません。固定電話を使っているときは家族が寝てしまうような時間や、食事中など気を遣って避けることができました。いつかかってくるかわからないので四六時中スマホを近くに置くことになります。目の前の友達と話しているときでもスマホと話すことを優先する場合もあります。これでは本当に対面のコミュニケーションに集中することは難しいでしょう。

テレビを見ながら本を読むことはできてもスマホで会話しながら読書はできないのではないでしょうか。それだけスマホは自分の集中を奪ってしまう道具です。いつ着信があったか確かめなくてはいられない中毒症状の人もいます。

便利になったのにコミュニケーション低下を招く。矛盾した進化だと思います。スマホを見ないようにする時間や本に没頭する時間も大事にしてください。